

4. 織鶴タオルの今後

タオル織機でデニム生地をつくる

片上義春氏は、従来の「タオル」の定義に束縛されている限り、タオル業界の将来はないと考えている。片上氏なりの解決の方法は、アパレル生地、とくにデニム生地の供給である。片上氏は、「これまでタオルでいろんなことをやってみて、本当に最後にやってみたいのはジーンズやね。タオルはなんぼ開発しても家のなかで使うものでしょ。ファッション性で言うたら限界がある。ジーンズやったら世界相手に勝負できるでしょ」と語る。



工場内には、織機（左）や整経機（右）などが設置されている

ここ数年、タオル用自動織機でデニムの生地をつくり、それを商品化できないかと悪戦苦闘を繰り返してきた。タオルの特徴である「パイル」にこだわることなく、また素材も通常デニムに使用される綿糸に固執するのではなく絹糸を使ったものなど、少なくとも15のデニム生地のパターンを考案し試作してみた。興味を示してくれ

たデザイナーはいたが、まだ商品化には至っていない。タオル織機でデニム生地をつくるという発想を具現化できれば、かつてタオルマフラーが登場してタオル業界のカンフル剤になったように、大きなムーブメントになる可能性がある。タオル織機にこだわって差別化を図る片上氏の「タオル織機は一種の特殊な織機なんですよ」と言う言葉には、新たな市場開拓へのヒントが隠されている。



さまざまな製品を生み出し大切に保全されてきた豊田式自動織機

2006年頃に片上氏はひどく体調を崩し、それ以来体力の衰えを痛感している。また、2018年には風呂上がりのにのぼせてしまい、喉にモノを詰まらせて気を失った。近くにいた妻のミユキ氏の適切な手当てによって九死に一生を得たが、いつまた倒れるかもしれない不安のなかで、片上氏は「自分に残された時間は多くない」と語る。しかし、タオル織機でデニム市場へ参入することは片上氏の身近な夢である。デニムにこだわる理由は、タオルの将来を考えての片上氏なりの解答である。


今治の綿織物業の歴史を振り返ると、この地域は、時代のニーズに合わせて小幅木綿から広幅木綿、綿ネル、タオルへと製品を柔軟に変え、綿織物という伝統産業の火を消すことなく歴史を紡いできた。今治の歴史が教えてくれるように、片上氏は、長年タオル業界に携わりモノづくりにとり組んできたからこそ、今ここでタオルか

ら何か違うモノへのシフトが必要ではないかと考える。デニム参入への思いは、そうした片上氏のタオル愛、地元愛から来ている。



タオル織機で生み出された多様な柄のデニム用生地

日々、孤独な闘いをつづけている片上氏は弱気にもこう話す。「商品化までこぎつきたいけど、もうそれだけの体力もないしね。今まで持ちこたえただけでも良しとせんといかん。欲を言うたらきりがないね。」

孤独な闘いではあるが、片上氏の、モノづくりに情熱を燃やす人びとのネットワークは、着実に広がりつつある。たとえば、尾道市にある NPO 法人工房尾道帆布  の木織^{きおり}雅子氏、草木染めの村尾^{そうせん}草染氏、大成タオルの江原公臣氏など、片上氏が一目を置くモノづくりに対して熱い人たちである。「こうしたネットワークを活用すれば、夢が現実となり、もっと面白いものができるとおもうんですね」と片上氏。これからは体力との勝負であるが、夢の実現に向けて限られた時間をモノづくりに捧げている。



尾道帆布とコラボレーションした
小型のカバン

5. 好きな言葉

一期一会

片上氏は、出会いをととても大切にしている。それは、タオル業界に入ってたくさんの出会いがあり、これらの出会いが自らを成長させてくれたからである。

まず、タオルづくりの職人として一人前になる前に、愛媛県立今治工業高等学校の紡織科でタオル製造の基本を教えてもらった恩師の池内敬一郎先生、広洋タオルに入社して多くのことにチャレンジさせてくれた社長の秋山幸雄氏、広洋タオル時代に織機の指導（営業）に来ていた豊田織機の技術者たちとの出会いである。片上氏が「人に教えてもらうときは何でも構わんから、一流の人に教えてもらわないといかん」と話すように、今振り返っておもうのは、モノづくりの基本を教えてくれた人たちが一流だったということだ。一流の人とは、技術や知識に長けているのはもちろんだが、モノづくりに対する姿勢が真摯で誠実である人たちである。片上氏自身が人生をかけてモノづくりに没頭できたのは、こうした人たちに出会えたからである。

そして、同じ姿勢でモノづくりに向き合う大成タオル（株）の江原公臣氏、また最近では草木染めについて教えてもらったりアイデアのヒントをもらったりしている染色家の村尾草染氏など、片上氏のタオル人生において何事にも変えがたい「一期一会」の出会いがあった。「金儲けは下手やったけど、いろんな人との出会いがあったのだけは宝じゃ」と片上氏は笑う。

余談になるが、片上氏が一期一会で出会った3名の女性には今でも敬意を表している。それは、池内先生の自宅に遊びに行った際に世話になった池内先生夫人、取引のあった山田正布の女将、大成タオルの女将である。いずれの女性も凛としていて威厳があって、「このお母さんにしてこの息子じゃ。子供の教育において母親がいかに大事かっていうのがようわかる」と片上氏は感心したそうである。

努力

好きな言葉というより、片上氏がタオルづくりをとおして確信していることが「努力することの大切さ」である。いい加減な気持ちでいい加減にモノづくりをしていると、何も生まれにくい面白くない。努力してこそ、見えてくる世界が違う。「努力したからといって報われるとは限らんけどね。その人がどれだけ納得してやれるか。それとやっぱし織物が好きじゃないとできんとおもいますよ。」片上氏のタオル人生そのものを表す言葉である。

「ほやけど、最初にタオルの組織やタオルの織機をつくった人は素晴らしいですね。わたしも若い子に教えるときがあるけど、織機が思うように直らん言うて弱音を吐いていると、『最初にモノづくりした人は、何倍も努力している。それが直らんなんか言うのは不屈者じゃ』って言いながら教えとる」と、片上氏は最後に笑みを浮かべながら話してくれた。（次号につづく）

